

## 第107回 岡山外科会

とき：昭和63年11月13日（日）10時より

ところ：せとうち児島ホテル2階雲海の間

会長：竹馬 浩

（平成元年2月9日受稿）

### 1. MRIにて診断された小脳梗塞の1例

水島第一病院脳神経外科	西野 繁樹
岡山大学脳神経外科	衣笠 和孜
水島第一病院外科	守屋 直人
同 内科	田頭 尚
光生病院放射線科	鳴村 廣視
	西村 正隆
	小野 敦

今回、MRIにて確定診断された小脳梗塞の1例を経験したので報告する。

高血圧のある54歳男性が起床時に突然のめまい、嘔吐で発症し内科に入院したが、CTスキャンは正常であった。失見当識が出現したため第6病日に脳神経外科を紹介され、神経学的には、失見当識、水平性眼振、小脳失調などを認めた。同日のCTスキャンでは、急性水頭症はあるが、確定診断には至らなかった。続いて右BAGを施行したが、右椎骨動脈の狭窄を認めるが、後下

小脳動脈は造影されていた。MRIでは、T<sub>1</sub>WIでは低信号域として、またT<sub>2</sub>WIでは著しい高信号域として描出され、小脳梗塞による閉塞性水頭症と診断された。第24病日のMRIで、T<sub>2</sub>WIで低信号域が出現し出血性梗塞と判断された。

MRIでは、虚血病巣が検出されるまでの時間が短く、骨によるartifactがないなど、今後MRIは装置の普及に伴って有力な診断手段となると考えられる。

### 2. 脳実質内気腫を合併した外傷性髄液鼻漏の1例

#### — 瘢孔の確認とその処置について —

水島中央病院脳神経外科	秋岡 達郎
同 外科	江田 泉
岡山大学脳神経外科	久山 秀幸 古田 知久

症例は17歳の男性。交通事故により前頭部を強打し、約1ヵ月後に髄液鼻漏をきたした。神経学的には異常なく、頭部単純写で頭蓋骨折と脳室とは非交通性の空気貯留像を認め、CTで左前頭葉実質内に卵円形の気腫を認めた。頭部断

層撮影で左前頭蓋底に陥没骨折と、それと交通した脳内気腫を認め開頭術により硬膜欠損部を筋膜とフィブリン糊を用いて修復した。術後、経過は良好である。瘻孔の確認法とその処置について考察を加えて報告した。

### 3. 外科領域における MRI の有用性

光生病院外科 佐 能 量 雄 宮 崎 医 津 博 金 泽 一 典  
 梶 谷 伸 顯  
 同 放 射 線 科 小 野 敦  
 岡 山 大 学 脳 神 経 外 科 松 海 信 彦

昭和63年8月より0.5Tesla超電導MRI装置を導入し、頭頸部疾患や胸腹部疾患について、その診断能を検討した。肺癌、縦隔腫瘍、食道癌、肝癌、直腸癌などにおいても、T<sub>1</sub>・T<sub>2</sub>強調画像を組合せることにより、またガドペンテト

酸メグルミンの併用により、腫瘍の抽出のみでなく、質的診断、進展範囲、血管との位置関係を任意の方向から明確に捉えることができ、治療の選択、Stageや切除範囲の決定、予後の判定に有用であった。

### 4. 上腕骨内上顆骨折の治療経験

岡山済生会総合病院整形外科 藤 本 裕 人 見 康 満 定 金 卓 爾  
 橋 詰 博 行 高 城 康 師 長 谷 川 康 裕  
 内 田 陽 一 郎  
 成 羽 病 院 整 形 外 科 小 倉 丘

過去14年間の上腕骨内上顆新鮮骨折46例について検討した。不安定性がなく骨片の転位が3mm未満のものをstage I, 3mm以上をstage II, 不安定性のあるものをstage III, 脱臼に到ったものをstage IVとした。stage II以上を手術適

応としている。不安定性のあるもの内、骨片に靭帯が付着する型では骨片の整復により安定性が得られるが、靭帯断裂を合併した型では骨片の整復と共に靭帯の修復を行なうことが重要と考える。

### 5. 腕神経叢に発生した神経鞘腫の1例

岡山大学整形外科 松 下 具 敬 花 川 志 郎 横 山 良 樹  
 山 根 孝 志 田 中 雅 人

41歳男性の鎖骨上窓部の腕神経叢に発生した神経鞘腫を経験した。中神経幹後枝の細い一神経束が腫瘍内に入ってしまっており、やむをえずこれを切断して、腫瘍を全摘出した。摘出腫瘍は45×40×20mm大の、三角おむすび型囊胞で、組織は

Antoni AB混合型であった。術後、前腕内側に軽度の知覚低下を認めるのみであった。術前の放散痛は消失した。

M.R.I.検査は、腫瘍の局在・形態・性状診断に於て、CT検査に比較し、有用であった。

### 6. 掌蹠膿疱症と骨病変

岡山赤十字病院整形外科 板 寺 英 一 三 宅 完 二 小 野 勝 之  
 那 須 正 義 井 上 修 一 永 易 大 典  
 東 原 信 七 郎

胸肋鎖骨間部以外の病変を有する、比較的まれな掌蹠膿疱症性骨関節炎の3例を報告し、その骨病変に関して若干の文献的考察を加えた。

胸肋鎖骨間部の病変は2例に認められ、そのうち1例に異常骨化がみられた。脊椎病変は強直像が主体のものと骨硬化像が主体のものがあつ

た。大腿骨病変は組織学的には骨髓炎が疑われたが、細菌培養は陰性であった。四肢関節病変

は骨シンチで異常集積を認めたが、レ線上、骨破壊は見られなかった。

## 7. 胸・腰椎損傷例に対するハリントン法の検討

岡山労災病院整形外科 萩野真一 島田公雄 宗友和生  
鶴上浩 難波賢 前田裕幸  
甲康成

過去6年間、ハリントン法にて治療した胸・腰椎損傷33例について、骨折型、損傷部位・麻痺の推移、レントゲン上の計測、体幹筋力、脊柱の可動性などを検討した。胸腰移行部の屈曲脱臼骨折、破裂骨折が多く、受傷時より麻痺が

悪化した症例はなかった。レントゲンでも整復位は保持されていた。抜釘群の筋力・可動性が優っていた。よって症例を選べばハリントン法は有用な治療法の一つと考えられ、適当な時期に抜釘するのが良い。

## 8. 腰椎椎間板ヘルニアの術前MRIの検討

岡山旭東病院整形外科 大坪秀樹 鷹取芳郎 土井基之

髓核摘出術により、腰椎椎間板ヘルニアと確定診断できた5例について、術前MRI画像をT<sub>1</sub>・T<sub>2</sub>強調像で各々3項目検討した。特に、Gibsonの分類を参考にした椎間板変性度・周囲組織の評価である硬膜外脂肪組織の途絶像・脊

椎管内の高輝度像が、症状発現の椎間板高位診断に有用であった。更にミエログラフィーで所見が描出されにくい症例、CTミエロで圧迫組織の鑑別が困難な症例においても、MRIは有効であった。

## 9. 外傷性膝関節脱臼による膝窩動脈損傷例について

川崎医科大学整形外科 渡辺博義 日高典昭 山野慶樹

外傷性膝関節脱臼による膝窩動脈損傷の2例、22歳男性、66歳男性に対して静脈移植を行った。10時間以上経過して再建した症例でも下腿筋萎縮(compartment syn)は軽度で、膝関節は2

例とも比較的安定で、ADL上特に制限を認めていない。膝窩動脈の早期診断、早期再建的重要性を述べた。

## 10. 骨原発性悪性リンパ腫の1症例

岡山市立市民病院整形外科 広岡孝彦 渡辺唯志 平田常雄  
毛利隆広 菊山真行  
同 内科 坪田輝彦  
同 病理 村尾烈

骨原発性悪性リンパ腫は、比較的稀な腫瘍で、中年に好発し、5年生存率は50%前後と言われる。

我々は今回、右鎖骨の病的骨折で初発し、左

鎖骨、右上腕骨、肋骨、肝及び脾に転移をきたし、高Ca血症による腎不全で死亡した1例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

## 11. 小児足趾切断に対する再接着例

川崎医科大学整形外科　日高典昭　渡辺博義　山野慶樹

小児の足趾切断に対する再接着を2例に施行した。2例とも変形や成長障害などをみとめず、美容的に良好な結果を得た。また、機能障害もなく知覚も充分に回復した。全身麻酔や抗凝固療法による合併症はなかった。小児の足趾切斷

再接着は高度な技術が要求されるため報告例は少ない。手術に際しては、骨切除を避け、骨端線を温存し、また挫滅の強い例では血管移植を必要に応じて追加することが肝要である。

## 12. 気管原発腺様囊胞癌の1例

国立岡山病院呼吸器外科	浦上　淳	野村修一	平井隆二
	東　良平	佐々木　澄治	
岡山中央診療所	治部　哲哉		

症例は37歳女性。6年間気管支喘息として治療を受けたのち、胸部X線写真で気管の異常を指摘され当院紹介となった。常に吸気性喘鳴があり頸部伸展位で呼吸困難著明となった。検血、生化学、甲状腺機能、各種腫瘍マーカーなどは正常。呼吸機能は%VC87%，1秒率86%，フローボリューム曲線で上気道狭窄パターンを示した。胸部X-Pでは気管透亮像の中に円形の陰影を認めた。断層撮影、軟線撮影でも気管内に円形の腫瘍陰影を認めた。CTでは気管左壁より発

生した腫瘍で、壁外にも発育していた。気管支鏡検査では表面平滑で球形の腫瘍を認めた。手術は前頸部襟状切開により第3～5気管軟骨と甲状腺左葉3分の2を切除した。切除標本では気管は17mm、腫瘍は17×15×15mmで黄白色で軟かく気管内腔をほぼ閉塞していた。気管原発腺様囊胞癌は断層撮影や気管支鏡検査を行えば診断は決して困難ではなく、積極的な検査が重要であると思われた。

## 13. 当院に於る気管支性囊胞の検討

倉敷第一病院外科	尾崎倫孝	佐野由文	近藤潤次
原史人	中嶋健博		

当院にて経験した気管支性囊胞8例について検討した。肺内型では、下葉に限局しており、全症例で炎症所見を認めた。肺外型では、後縦隔、食道粘膜下、横隔膜内に存在し、症状は特に認めなかった。病理組織学的には、ほぼ全例

で線毛円柱上皮、気管支腺を認めたが、軟骨を認めたものは5例であった。治療として、肺内型は感染を繰り返すことより積極的に手術を考え、又、肺外型では、症状等なければ、定期的経過観察でよいと考えられた。

## 14. 肺内神経鞘腫の1治験例

川崎医科大学胸部外科	太田　喜久子	勝村達喜	藤原　巍
野上　厚志	山根尚慶	吉田　浩	

32歳、女性の左肺内に発生した神経鞘腫の1例を経験し、手術的に治癒せしめたので文献的考察を加えて報告する。

第5肋間で開胸、上下葉間胸膜を切開し、腫瘍を全摘した。腫瘍は3×4cm大、類円形、一部cysticで被膜に被われており、組織学的には、

神経鞘腫（Schwannoma）と診断した。肺内神経鞘腫は、本邦では自験例を含め14例の報告が

あるのみで、originとしては、迷走神経と交感神経の2つが考えられた。

### 15. 最近経験した肺犬糸状虫症の1例

倉敷第一病院外科 佐野由文 尾崎倫孝 近藤潤次  
原史人 中嶋健博

近年増加してきている人畜共通感染症の一つである肺犬糸状虫症の1例を経験した。症例は66歳、女性。自覚症状無く、犬の飼育歴はない。昭和63年6月1日胸部X線にて異常陰影を指摘され、6月22日精査目的にて入院となった。7

月27日肺部分切除術施行、病理学的に肺糸状虫症と診断した。同症も、肺に腫瘍影をきたす疾患の一つとして念頭に置く必要があると思われる。

### 16. 内胸動脈を用いたCABGの効果 —左室壁運動を指標とした検討—

心臓病センター榎原病院心臓血管外科 杭ノ瀬昌彦 畠隆登 難波弘文  
曾根良幸 江石清行 高田茂実  
谷口堯

内胸動脈を用いたCABGが術後心機能を改善させるかを左室壁運動を指標として検討した。術前LVGにてAHA分類上Seg 2, 3が低下した症例を対象とし、術前後のLVGで左室駆出率(EF)、前壁の左室局所収縮率(antRS)の改善

及び臨床症状の改善を検討した。その結果EF, antRSは著明な改善を示し臨床症状の改善もみた。これにより内胸動脈を用いたCABGは虚血により一旦低下した左室壁運動を改善する効果を有すると考えられる。

### 17. 最近1年間の乳児心臓手術症例の検討

心臓病センター榎原病院心臓血管外科 江石清行 谷口堯 畠隆登  
難波宏文 曽根良幸 高田茂実  
杭ノ瀬昌彦 土肥嗣明 森一博

最近1年間の乳児心臓手術症例について検討を加え報告する。症例はd-TGA (ECDtype) + mitral cleft + PH 1例 (Jatene op + VSD patch closure), TOF 1例 (lt modified B-T shunt), incomplete ECD + TR + PH 1例 (patch closure), PPA + PDA + ASD + hypoplastic RV 1例 (PDA ligation + Brock op + lt B-T

shunt + central shunt), VSD + ASD + PH 1例 (ASD direct closure + VSD patch closure), VSD + PH 1例 (VSD patch closure), PDA + Co-Ao 1例 (PDA ligation), PDA + PH 2例 (PDA ligation) であり、年齢は生後9日から2歳であった。全例、重篤な合併症もなく術後経過は良好であった。

### 18. 高齢者先天性気管支食道瘻の1例

岡山大学第二外科 三竿貴彦 伊達洋至 多胡護  
清水信義 寺本滋

73歳女性の先天性食道気管支瘻の1治験例を報告した。幼小時より飲食時咳嗽発作があり食

道透視等の検査にて瘻管を確認し瘻管切除と右肺下葉切除を行った。本症例は診断確定時年齢

が本邦最高齢であり、唐沢らの「先天性」の判定基準をほぼ満たしたものであった。更に瘻管に伴走する迷走神経肺臓枝を確認したことは「先

天性」を裏付ける一根拠であると我々は考えた。また罹患肺の合併切除の適応についても文献的考察を加え報告した。

## 19. 壁内転移を有する食道癌症例の臨床像

岡山大学第一外科 上川康明 森木康之 合地明  
三村久 折田薰三

最近5年間の食道癌切除例62例について検討した。壁内転移は12例、19.4%にみられた。転移個数は単発が6例で、最も多いものは11個であった。又3例が口側の転移を認め肛門側への転移が多くを占めた。壁内転移陰性例と陽性例の間で著しい差を認めたのはリンパ節転移に関

してであり、陰性例、陽性例のリンパ節転移率は、それぞれ53%、100%で、n-numberも陽性例ではn3、n4が多くを占めた。転移リンパ節個数も陽性例の方が明らかに多く、予後不良な壁内転移例の側面がうかがえる。

## 20. 縦隔脂肪肉腫の1例

岡山大学第二外科 山本浩 久持邦和 岸淳彦  
岡田正比呂 紀幸一 多胡護  
清水信義 寺本滋

脂肪肉腫は軟部組織に発生する肉腫の中では、線維肉腫とともに代表的なものであるが、縦隔腫瘍の中での脂肪肉腫の占める頻度は極めて低く稀である。今回われわれは、後縦隔に発生し、

椎体の前側面を取り囲むように馬蹄形を呈した特異な形態を有する本症を経験したので、若干の文献的考察を加え報告した。なお、本症例は当教室における2例目であった。

## 21. 特発性食道破裂の1手術治験例

岡山済生会総合病院外科 三好和也 木村秀幸 片岡和男  
北村元男 大原利憲 戸田耕太郎  
川畑正充 間野清志

症例は47歳男性。飲酒して嘔吐した直後の左胸背部痛および腹痛を訴えて救急来院した。胸部X線・CTで特発性食道破裂と診断し、発症後5時間にて左開胸下に横隔膜直上の食道左前壁にあった6cmの縦裂部を層々に縫合閉鎖した。

経過良好にて術後40日で治癒退院した。当院における過去2例の不幸な転帰をふまえて、本症に対する早期診断・早期治療の重要性を痛感させられる症例であった。

## 22. 胃平滑筋芽細胞腫の1例

光生病院外科 宮崎医津博 佐能量雄 金澤一典  
梶谷伸顕  
同 麻酔科 小林収  
同 内科 石井純一 前田典子

最近我々は、比較的稀な胃平滑筋芽細胞腫の

1例を経験したので報告する。症例は83歳の男

性で主訴は下血。出血性胃癌の診断で手術を行なったが、腫瘍は潰瘍を形成する粘膜下腫瘍で、病理組織診断は平滑筋芽細胞腫であった。本腫瘍は大部分良性の経過をとるが、稀に転移する

こともあるため、悪性度の指標が確立していない現時点では、本症に対しては、リンパ節郭清を含む胃切除を行ない、術後も経過観察が必要であると考えられる。

### 23. 十二指腸癌の1例

おおもと病院	岩本伸二	石賀信史	庄達夫
	石原清宏	酒井邦彦	岩藤真治
	山本泰久		
高松通信病院	藤井康宏		

69歳の男性で心窓部痛を主訴に来院。黄疸を認めたためPTGBDを施行。内視鏡、十二指腸造影にて乳頭下部癌と診断し、脾頭十二指腸切

除術を施行した。腫瘍は乳頭下部に存在し、深達度は脾に一部浸潤したpanc<sub>1</sub>であった。術後良好に経過している。

### 24. 十二指腸乳頭部カルチノイドの1例

岡山大学第一外科	浜田史洋	渕本定儀	合地明
	上川康明	田中信一郎	阪上賢一
	折田薰三		

我々は、十二指腸乳頭部原発のカルチノイド症例を経験したので、報告した。症例は56歳女性で、主訴は黄疸、全身倦怠感であった。十二指腸下行脚に立ち上りの急峻な周囲を有する不整形陥凹病変を認めた。血管造影では特変なく、

CTにて約2cmの腫瘍像を得た。脾頭十二指腸切除を施行し組織診断にて、銀染色陽性よりカルチノイドと診断された。本邦集計例によれば、乳頭部カルチノイド、20例目と考えられた。

### 25. Lithotron EL-21を用いて内視鏡的切石術を施行した肝内結石症の1例

倉敷中央病院外科	武田亮二	高三秀成
----------	------	------

肝内結石症は、一般に治療成績の良好な胆石症の中で最も難治性のものである。我々は、肝両葉に肝内結石が充満し、肝内胆管(S<sub>3</sub>, S<sub>6</sub>, S<sub>7</sub>, S<sub>8</sub>)に狭窄がある為、手術適応のない肝内結石症患者に対して、経皮経肝胆道内視鏡を行

い、電気水圧衝撃波を用いて切石を行った。使用した電気水圧衝撃波装置はLithotron EL-21(Waltz社)で、計11回結石破碎を行い、良好な結果を得たので報告する。

### 26. PTP異物の3例

岡山労災病院外科	間野正之	杉山悟	原田英樹
	石原弘道	津田昭次	古本雅彦
同 内科	宇野順三郎		

症例1、51歳、女。食道内のPTPを直腸用のsliding tubeを挿入しfiberで回収した。症例2、63歳、男。食道下部にPTPがあり潰瘍形成で多

量出血があったが、自然排出した。症例3、75歳、男。急性腹膜炎で開腹すると、S字状結腸に小さな穿孔があり、腸管を単純縫合閉鎖した。

文献症例数154例、男55例、女72例で、壮年と老年に多く、位置は食道が大部分である。合併症の穿孔は食道13(開胸2), 空腸1, 回腸4, 結

腸1(開腹6)である。PTP誤嚥の予防対策は難しい。

## 27. 上下腸間膜静脈—左腎静脈短絡による猪瀬型肝愁症の1手術例

岡山大学第一外科 森 光樹 三村 久 柏野 博正  
浜崎 啓介 津下 宏 岡林 孝弘  
野田 卓男 折田 薫三

肝梗塞を伴わない上、下腸間膜静脈—左腎静脈短絡を伴う猪瀬型肝愁症の1例を経験し、外科的短絡路閉鎖切除術及び摘脾により肝機能等に著明な改善を得たので報告する、症例は51歳女性、昭和59年頃より手指振戦等の肝性脳症の症状が出現していたが、昭和63年に精査結果、猪瀬型肝愁症と診断され同年9月当科入院となつた。入院時所見では脾腫、汎血球減少症、高

アンモニア血症、肝機能低下を認め、腹部CT、血管造影で肝臓の萎縮、脾臓の腫大、門脈—下大動脈短絡を認めた。10月6日短絡閉鎖切除及び摘脾術を施行した。術後汎血球減少症、肝機能の改善をみた他、RI-肝血行動態の検討では有効肝血流量の著明な増加と門脈血流量の改善をみた。

## 28. 巨大臍囊胞腺腫の1例

岡山労災病院外科 杉山 悟 間野 正之 原田 英樹  
石原 弘道 津田 昭二 古本 雅彦

患者は、44歳女性。主訴は、腹部腫瘍。昭和61年頃から左上腹部に腫瘍を触っていた。入院時、左上腹部に表面平滑、弾性硬で圧痛のない球形の腫瘍を触知した。尿糖は(+)であった。US、CT、腹部血管造影で臍囊胞と診断し、昭和

63年9月7日開腹、臍体尾部切除を施行した。囊胞は、 $15 \times 12 \times 9\text{ cm}$ で、重さ780g。内溶液は、比重1.049、粘性のある暗緑色であった。組織学的には、mucinous cystadenomaであった。

## 29. 興味ある経過をたどった臍十二指腸損傷の1例

国立療養所津山病院外科 中井 幹三 渡辺 哲也 菅田 汪

十二指腸断裂・臍挫傷に対する手術後第9日目に臍周囲の血管から大量出血を来たした症例を経験した。臍外傷術後の出血を予防するため

には、臍損傷の程度を適確に把握し、壊死組織の除去・止血・臍液誘導を行うことと、術後臍炎に対する治療が重要と思われた。

## 30. 脊血管筋脂肪腫の1手術例

岡山済生会総合病院外科 木村 臣一 丸尾 幸喜 簡井 信正  
広瀬 周平 三村 哲重 日下 敏  
間野 清志

症例、30歳、女性、結節性硬化症なし。妊娠9ヵ月時、下腹部痛を訴えた。出産後、エコー、CT、血管造影を施行し、右腎にCTにて脂肪と

一致した low density area と編目状の隔壁構造より成る腫瘍を認め、脊血管筋脂肪腫と診断し、右腎摘出術、腎門部リンパ節郭清を施行し

た。組織学的には腎門部リンパ節にも同様の病変を伴う腎血管筋脂肪腫であった。自験例を示

し、若干の文献的考察を加え報告した。

### 31. 異所性褐色細胞腫の1例

岡山赤十字病院外科	古谷 四郎	佐藤 泰雄	大塚 康吉
	小野 監作	川上 俊爾	辻 尚志
	石崎 雅浩	宇高 徹総	
同 内科	横山 久光		
同 病理	國友 忠義		

59歳男性で昭和63年2月より発作性頭痛あり、高血圧を指摘された。血中尿中アドレナリンは正常でノルアドレナリンが高値を示した。CTで paraaorta で IVC と左腎静脈の背側に腫瘍があり、MIBG でも集積像が認められ、異所性の褐

色細胞腫と診断された。prazosin 4 mg/日内服し開腹で摘出した。4.5×3.4×3.5で充実性。病理で浸潤像があり悪性と診断された。リンパ節転移はなし。術後血圧は正常化し、血中尿中ノルアドレナリンは正常値となった。

### 32. 後腹膜悪性線維性組織球腫の1例

医療法人行堂会長野病院	今井 博之	西岡 利恭	荒川 雅久
川崎医科大学附属川崎病院病理	水島 瞳枝		

82歳の女性にみられた。後腹膜悪性線維性組織球腫の1例について報告した。

全身倦怠感を主訴に来院。右下腹部に可動性の無い腫瘍を触知した。消化管造影、DIP、CT、超音波検査により後腹膜腫瘍と診断し、摘出術

を行なった。腫瘍は2個(1,012 g, 46 g)完全摘出術が行なわれた。組織学的に、悪性線維性組織球腫(storiform-pleomorphic type)と診断した。術後4カ月に局所再発を来し、術後10カ月死亡した。

### 33. 後腹膜滑膜肉腫の1例

岡山大学第二外科	久持 邦和	臼杵 尚志	小松原 正吉
寺本		滋	

後腹膜原発滑膜肉腫は極めて稀であり、内外の報告例は7例にすぎぬ。今回26歳女性の後腹膜に発生した巨大な滑膜肉腫について摘出術を行ない、化学療法を付加した。本症は症状に乏

しく、巨大化して初めて発症することが多いため、摘出し得ても2年以上の生存例がなく、予後不良の腫瘍である。

### 34. 下肢慢性動脈閉塞症に対する in situ saphenous vein bypass の検討

川崎医科大学胸部心臓血管外科	福田 久也	藤原 巍	土光 荘六
	稻田 洋	正木 久男	森田 一郎
	勝村 達喜		

下肢慢性動脈閉塞症の治療において、特に末梢の血流の悪い場合に対しては、saphenous vein graft を用いるのが良く、その上 long bypass に

は、in situ 法が、すぐれていると言われているが、手技が難しいという問題があった。しかし最近開発された valve cutter にて弁の破壊が簡

單に行なえるようになったので当科で用いた valve cutter を紹介する。

### 35. In-situ saphenous vein graft による大腿動脈 — 後頸骨動脈バイパス術の経験

国立岡山病院心臓血管外科 松森秀之 藤田邦雄 白井由行  
浦上淳 谷崎眞行

下肢閉塞性動脈硬化症に対するバイパス手術の術式のうち大伏在静脈を一部分のみ遊離することによって bypass graft として用いる in-situ saphenous vein bypass には多くの利点があることは従来より報告されている。本術式における

手術手技上の最大のポイントは大伏在静脈の弁破壊であるが、我々はこの in-situ bypass において新しい valve stripper を用い容易かつ安全に弁破壊が可能であったので報告する。

### 36. 膀胱内に特異な浸潤を来たした S 字状結腸癌の 1 治験例

津山中央病院外科 波多野 浩明 道満 尚文 中島 明  
大山 正史 黒瀬 道弘 徳田 直彦  
同 泌尿器科 赤枝 輝明 水田 栄一

膀胱内腔へ異常に増殖し、病理学的には粘膜下層で浸潤が止まっていた、S 字状結腸癌の 1 例を経験したので報告した。

大腸癌においては、周囲臓器への炎症性発着

もしばしば認められる為、骨盤内臓全摘術等の拡大手術の適応は、慎重に決定されるべきと思われる。

### 37. 外傷性小腸狭窄症の 1 治験例

川崎医科大学消化器外科 林 健太郎 牟礼 勉 木元 正利  
長野 秀樹 清水 裕英 岩本 末治  
柏田 順一郎 藤森 泰孝 延藤 浩  
山本 康久 佐野 開三

患者は、57歳男性で、交通事故にて右下腹部を強打。その10日後に心窓部不快感、嘔気が出現。近医にて保存的治療を受けるが、イレウス症状を繰り返すため当科に入院。小腸造影で空腸に全周性狭窄を認め、本症と診断し開腹。

Treitz 鞍帯から 150cm の小腸に著明な狭窄あり、腸間膜は肥厚、短縮、同部の腸切除を行い、順調に軽快した。組織学的には狭窄腸管に潰瘍あり、循環障害による変化と推測された。

### 38. 痢瘍癌（肛門管癌）の 3 例

チクバ外科胃腸科肛門科病院 中谷 紳 竹馬 浩 瀧上 隆夫  
場田 浩二 友近 浩

長期間存在した痔瘍を母地として発生したと考えられる肛門管癌（痔瘍癌）3 例を経験したので、文献的考察を加え報告した。

日常診療においても、長い経過を持つ痔瘍で

mucin の分泌が認められる様なものには十分な注意をはらう必要があり、積極的な組織診断を行なうべきであると考えられる。

### 39. 骨盤骨折に伴う多量出血に塞栓術が奏功した1例

岡山赤十字病院外科 石崎雅浩 古谷四郎 佐藤泰雄  
 大塚康吉 小野監作 川上俊爾  
 辻尚志 宇高徹総

骨盤骨折による多量出血は、保存的療法だけでは止血困難な場合も多く、患者の死因にも大きく関与している。

今回、我々は骨盤骨折にともなう多量出血で、約5,000ccの輸血にても状態の改善を得なかった

症例に、内腸骨動脈塞栓術を施行したところ、著効し輸血量が激減、不要となり血腫増大も止まった症例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

### 40. 原発性虫垂癌の2例

水島協同病院外科 丸川忠憲 江口孝行  
 同 病理 門田尚

原発性虫垂癌は比較的稀な疾患であり、術前診断は困難とされている。われわれは、急性虫垂炎の診断で手術を施行した、64歳及び68歳女性の colonic type の虫垂癌2例を経験した。

緊急手術となる症例では、虫垂癌の術前診断は極めて困難であるが、腹部超音波検査の慎重な検討が、補助診断のひとつになると考えられる。

### 41. イレウス症状を呈した虫垂粘液囊腺腫の1例

川崎医科大学附属川崎病院外科 津崎貴春 光野正人 川崎祐徳  
 同 病理 吉岡一由  
 伊藤慈秀

症例は74歳女性、主訴は右下腹部痛、腹部膨満感。右下腹部に圧痛を伴う表面平滑な弾性硬の可動性のない鵝卵大の腫瘍を触知した。注腸造影検査では盲腸に辺縁平滑な円形陰影欠損を認めた。虫垂は造影されなかった。CTでは回盲

部から骨盤腔に及ぶ腫瘍性病変を認め、腫瘍内容は water density であった。回盲部切除を施行した。腫瘍と回腸終末部に約7.5cm中に浸潤を思わせる癒着を認めたが、組織学的には虫垂粘液囊腺腫と診断した。